

書評

ロータール・フォン・ファルケンハウゼン
(吉本道雅解題・譯) 著

周代中國の社會考古學

宮本 一 夫

カリフォルニア大學ロサンゼルス校のロータール・フォン・ファルケンハウゼン教授の *Chinese Society in the Age of Confucius (1000-250BC)* *The Archaeological Evidence* の翻譯である。

序章に述べられるように、著者は考古學という學問分野によって周代の歴史的な理解を目指している。著者が暮らす米國あるいは英國では、考古學が人類學の強い影響を受け、單なる古器物の編年を目指す研究ではなく、生計・環境適應・生活狀態・文化的宗教的慣習・社會關係といった人間社會のより根本的な問題を早い段階から扱ってきた。一九六〇年代の新考古學運動の成果であるが、一方で過度な人類史の法則性への追究などが問題となり、一九八〇年代には物質現象の背景にある個人やその精神性の問題、あるいは研究者自らや研究對象に對する認知・認識論の問題などから批判が展開され、ポストプロセス考古學という新考古學への方法的な批判が起きている。現在の考古學はその二つの學派が

並立するとともに、それらの融合の模索がなされる段階でもある。そうした方法的な融合の模索の中にファルケンハウゼン氏が存在しているように思える。

著者は既に指摘してきているように、中國考古學が過度な文獻史學の影響下にあり、その弊害から脱することにあるとする。と同時に、新考古學に見られる安易な社會進化の法則性の中に考古學的諸現象を押し込めることへ警鐘を鳴らしている。新進化主義に基づく社會進化の分類に單純に社會現象を當てはめるべきでないという主張である。そのため、周代は「國家段階の社會」であるとしながら、その社會を特定の社會進化分類に當てはめるのではなく、具體的な出現のあり方、その變化や變容、社會を構成する個人や集團間の諸關係に注目する。そして周の領域である國家とその周邊に存在する非國家に注目し、それらの相互作用の重要性を認識するとともに、非國家を正當に評價したいと主張する。その點、評者も意見を同じくするところである(宮本二〇〇七)。そして、そのような社會變化を「西周後期禮制改革」と「春秋中期儀禮再編」という事象から説明しようとするものである。

そうした研究の方向性の基に、具體的な研究方法としては、新考古學で一般的な統計學的方法、ミドルレンジセオリー(中位理論)などを利用する。さらに社會人類學では一般的な概念である「リネージ」や「クラン」という概念を用いながら、社會單位を説明していくことになる。とくに「クラン」とは本來の同一的血縁集團ではなくともソダリティーを以て同じ出自集團と信じる人々を指し、これが現代中國において一般的に用いられる「氏族」に相當するとする。

このように本書は、考古學を用いて周代の歴史的な展開を明らかにしようとする野心的な大作であるといえよう。本書はⅢ部からなり、以下に目次を掲げる。

第Ⅰ部 等級の新しい基準とその適用（前八五〇年頃）

第一章 西周後期における貴族の再編

第二章 諸侯リネージにおける等級と性差（前一〇〇〇～前六五〇年頃）

第三章 ある華北の共同体（前八〇〇～前四五〇年頃）・人口統計學と等級

第Ⅱ部 内的な連合と外に對する分界

第四章 周文化圏内部におけるクランの差異（前一〇五〇～前五〇〇年頃）

第五章 周文化圏内部における民族的差異（前一〇五〇～前二五〇年頃）

第六章 擴大する社會（前一〇五〇年頃～前二二一年）

第Ⅲ部 變化と再定義

第七章 東周の宗教改革（前六〇〇年頃～前二二一年）

第八章 上級貴族と下級貴族の分裂（前七五〇年頃～前二二一年）

第九章 下級貴族の庶人階級との融合（前六〇〇年頃～前二二一年）

終章

第一章は、微氏一族の事跡が銘文に記録された莊白一號窖藏出

土青銅器群の分析である。微氏の個人名が記された銅器群をまず型式學的な位置付けから相對的な年代を押さえ、さらに銘文内容から、個人名の相對的な位置付けと同時期の周王との關係を明らかにするものである。そこでは血縁的な親族關係を示すリネージという概念から、微氏の父系血縁集團の單系的序列を明らかにするとともに、人類學的な分節化概念と『禮記』の記載から五世代ごとに分家が創設される事實を以て、西周中期にはリネージの分裂がはたされる段階とする。そのリネージの分裂こそが、西周前半までの社會秩序を亂すものでもあった。著者は史牆盤の年代を西周中期後半に位置付け、時あたかも周王朝自身が敵對する二つの家系に分裂した時期とする。さらにそうした周の秩序の揺らぎを再編する意味で著者が呼稱する「西周後期禮制改革」が存在し、その年代が前八五〇年頃とする。それは、リネージ成員を體系的に等級付け、酒器を伴わない禮器の組み合わせによって食物を供獻する新しい葬送儀禮からなるものである。

第二章は、寶鷄墓地、天馬・曲村墓地、上村鎮饒國墓地の分析により、特に副葬青銅彝器の構成から、階層差と性差に言及するとともに、それらにおいてリネージ間の格差が存在する可能性を指摘するとともに、リネージによる埋葬習俗の差異を指摘する。さらにこれらの分析から「西周後期禮制改革」の存在を實證しようとしている。また、克蘭外婚規制により、結婚は克蘭の境界を超えたリネージの同盟を示すものであり、女性はいくまでも女性自身の出自リネージの祖先崇拜を強いられることを説く。西周初期に確立した周王リネージを核とした階層構造が、基本的にリネージ間による階層構造をなし、それら身分標識でもある葬送

儀禮に反映しているとする點は、興味深い指摘である。さらにこれらの階層構造の搖らぎが見られる西周中期を介して、「西周後期禮制改革」へと變動するシナリオを描こうとしている。

續く第三章は、山西侯馬上馬墓地というほぼすべての集團墓が完全に發掘された貴重な墓地資料の葬送分析である。上馬墓地は西周後期―春秋末・戰國初期に連續する集團墓であるが、その分布から大きく六區に分かれている。これらの六區が、分節したりネージすなわち一つのリネージから分家した六つのリネージの集團墓であると考ええる。さらに人口統計學の手法を使いながら、各時代の墓地數から當時の人口を推定するものである。もちろん一部の女性や子供は埋葬されないというバイアスを考慮しながらの慎重な議論である。その結果は、西周後期後半から春秋中期前半まで急激に人口増加しながら、紀元前七世紀中葉には二五〇―三五〇人に達するとするものであり、ここに子供や從屬的な身分の女性、さらに外部出身者を加えるとその人口はほぼ二倍に考えることができる。歐米の人類學的考古學ではこの人口復原はしばしば科學的になされているが、本書でもその試みがなされている。こうした試みは、歴史時代の中國考古學ではこれまで初めてであるように思える。何故なら文獻史料による人口推定が一般的であるこの時代において、それが史料批判を含めて如何に心もたないものであるかを著者は知っており、文獻偏重主義の中國考古學者への實踐的な批判でもある。そして人口増加は、擬制的な血縁關係を含めて外部出身者の編入など分節したりリネージ間の格差を生むものでもあった。ただこうした變化は、より細かな葬送分析により、六つのリネージの時期ごとの墓地の擴大化とその階

層構造の變化を読み取るにより具體化するものと思われ、評者はそうした分析を今後期待するところである。

さて、本章ではこのような上馬リネージが、副葬品や墓葬構造から見た場合に、貴族と庶人という階層差が二三・五%對八六・五%の割合であるとする。さらに他の墓地群におけるこれらの割合との統計比較から見れば、貴族の割合が比較的低い、これは必ずしも現實を反映しておらず、系統的でない發掘の結果から導き出されるものであり、定量的な結論を引き出せないものとする。その上で、上馬リネージは天馬―曲村や上村嶺より低い等級を占めていたリネージであることを述べている。それが天馬―曲村などと同じ姫クランに屬するか、あるいは非姫クランであるかによって、解釋の差違が生まれることをも述べる。要するにリネージ單位での階層差が葬送分析でも明確になっているが、それがさらにクランという社會的な親族グループによってより複雑な構成となっていることが知られるのである。さらに庶人より下に等級づけられる下層階級が存在することは明らかであるが、先秦時代においては、むしろこれらが考古學的にも文獻史學的にも人口復原を含めて具體化できないことに問題がある。直接生産者である彼らこそ社會そのものを語ることができるからであり、評者を含め、我々が紐解いている材料が如何に社會の一表層であるかを改めて自覺するところである。

第四章では、これまで論ぜられたリネージの上部構造であるクランすなわち姓を考古學的に如何に捉えるかにある。洛陽や曲阜の周代の墓制を中心に中國考古學では、殷系と周系というクラン間の對立的な捉え方がよくなされるが、結論的には考古學的にそ

れを捉えることはできないとするものである。殷系の根柢の一つである腰坑についても、クランとの間接的な關係を示すものにか過ぎず、さらに土器の類型もクランを示すものではなく陶工の系統を示すものでしかないとする。これも中國考古學の文獻偏重主義への具體的な批判といえよう。ただし、先周期における土器型式の分布差が姫や姜といったクランを示すものであるとするならば、克殷以降の周が次第に統一性を高め、クラン間の關係性が變化したことを述べる。

第五章は、クランのさらに上部構造である民族差を考古學的に検討する。いわば非周社會の存在が考古學的にどのようにして捉えられるかにある。西周の陝西長安張家坡などに存在する洞室墓や山西曲村三區一一三號墓の青銅製三足甕・雙耳罐は、民族的差違を象徴的に示すものであるが、クラン間の關係のように明確に區分できない。一方、民族差を示すものとして、東周の陝西寶鶏市益門村二號墓の騎馬民族系墓葬があるとする。社會的な差違の激化から、「異民族」は周内部で明確に區分されるようになり、西周中期以降、民族差である周との區別が、周内部のクラン間の差違よりはっきりと可視的に區別されるようになっていくというシナリオを描く。同じ時期、長城地帯以北の北方青銅器民たちは、游牧という新しい生活様式と政治組織の進化を迎える時期でもある。

第六章は、周と非周の差違化とともに、典型的周の周邊地域への擴大過程を、中山王國、長江流域などの個別事例によって説明し、周のリネージ組織原理への編入過程として模索する。そこでは南方における農耕社會を背景とした漸移的な文化變容が見られる。一方で、游牧・牧畜社會の長城地帯以北では非周としての差

違化が明確となる。これは、農耕原理の周式リネージ組織を受け入れないものであり、周の領域化を受けない地域である。

第七章からは東周代の變化を論ずるが、その中でもここでは宗教的背景を概観する。まず、儀禮の焦點が、これまで祖靈であったものから、東周代には生者の儀禮共同體へ移ったことを、青銅彝器の銘文内容から述べている。すなわち死者の靈魂との交流は最早優先事項ではなくなり、禮器の用途も形式的なものに轉化している。そして戰國初期（紀元前五世紀中頃）までには祖先に對する宗廟祭祀が墓の副葬品から切り離され、墓は人間の存在する宇宙の様相を表現するようになり、世界のミニチュアモデルになると主張する。具體的には墓の副葬品に使われていた青銅禮器に變わって陶製の模造品で代用する明器が、紀元前四〇〇年頃までには周文化圏で一般化し、墓の中に全宇宙を象徴的に複製することを容易にしたとする。また、戰國前期の湖北隨州曾侯乙墓の椰室構造を根據に、墓が地下の家あるいは宮殿であることを物語っているとする。そして墓は死者の靈が樂しむ家か、そこへ旅するという來世のイメージに近づく。紀元前三世紀の甘肅省天水放馬灘一號戰國秦墓出土の日書・地圖・計量裝置も、來世においてうまく旅するための手段を墓主の魂に提供したと解釋する。またこの時期の宇宙的關係への關心は、曾侯乙墓の外棺や衣箱の文様と中山王墓地の棋盤に見いだされると説く。

第八章は東周墓の分析から、「春秋中期儀禮再編」の實態を示すものである。河南省浙川下寺春秋楚墓からは、西周後期の禮制改革で標準化された階層別の組成を遵守した「特別の器群」と楚において特有の禮器の組み合わせと判斷される「通常の器群」が

存在することが示される。これらの二群は楚以外にも廣く周文化圏にも認められ、「特別の器群」が西周後期禮制基準をおおむね遵守するのに對し、「通常の器群」はより地方的な様式と器形の特異性を示す。この間、性差も西周期に比べより擴大し、女性の地位の低下が著しい。こうした一連の變化は、河南省新鄭の祭祀坑にも示されるように、祖先祭祀の社會的な重要性の減少という事實と關連している。すなわち、「春秋中期儀禮再編」が新興の諸リネージの臺頭の中に、全貴族階層の儀禮慣行と特權を再定義することにより、少なくとも上級貴族の正統性を持ち続けることができたのである。こうした狀況の唯一例外が秦であり、西周後期禮制改革で普及した器種が保守的に存続し、戰國中期の商鞅變法で舊來のリネージ制度が一掃されるまで存続する。これに對する解釋は、秦では君主の地位が他の六國より強く、他地域では卿クラスのリネージがその地位を正統化するために新しい儀禮の制定を促進したとするもので、興味深い。

東周の楚墓は約一萬基が發掘されている。その膨大な數の楚墓の葬送分析を中心に第九章が始まる。その分析結果は、春秋時代には禮器が貴族の宗教的特權を物質的に表現するものであったのに對し、戰國時代にはその意味を失い、副葬品の豪華さという量的な要素が等級秩序を示すようになる。春秋時代の儀禮と出自に基づく身分標識から、戰國時代には經濟的な豊かさや社會的な身分差を示すように轉換している。こうした變化が實際の身分標識とどのように對應しているかは、文獻史學的にも考古學的にも検証することは難しいが、貴族と庶人の區分が以前以上に不明瞭になったことは確かであり、身分標識化された禮器群の使用という

儀禮上の特權が、社會階層の下方身分にも普及したことが物語られる。こうした狀況は第七章で論ぜられた祖先祭祀の縮小とともに、來世を含めた宗教的信條の變化と呼應している。こうした動向は、儒家が個人的な徳を儀禮における外向きの誠實さに振り向けるよう強調したように、リネージによる階層差ではなく、儀禮慣行に従う人々すべてに開かれたものと對應しているとする。

終章は、本書のまとめと展望を簡潔に述べている。本書の根幹的な主張に「西周後期禮制改革」と「春秋中期儀禮再編」がある。孔子ら儒家が理想とした周の正統的な儀禮制度とは、周王朝の初頭のものではなく、紀元前八五〇年頃の西周後期禮制改革にあると論ずる。それは貴族リネージに限定された儀禮制度であり、周王リネージを頂點とする社會體制を維持するためのものであった。この周の禮制は次第に擴大し、水平的な領域とともに、垂直的な方向への下部の社會階層を取り込むこととなる。こうした中で社會的な揺らぎを是正する意味で「春秋中期儀禮再編」がなされるが、戰國時代には貴族と庶人の差違が基本的に曖昧になっていく。それとともに周と非周社會との差違感が強調される傾向にある。このような一連の變化は、人口の増加が社會階層の低い部分を中心に廣がることと相關しているとする。農民も西周から春秋時代にはリネージを中心に編成されるが、戰國時代には官僚制度の中に編入される。軍隊も基本的同じ傾向を示し、軍事單位はリネージに屬していたものから、戰國時代以降、集團的軍事體制へ編入される。商人や職人も、こうした制度的な變遷の中に、貴族リネージに従屬していた可能性から、春秋後期以降の商業活動の勃興により獨立して行き、職業的リネージを形成していったと主

張する。

本書は、ジェンダー、リネージ、クラン、エスニシティ、階層構造といった社會を構成する様々なレベルでの社會區分を、徹底して考古學的に分析することにより、周代の社會を科學的にかつ具體的に描き出すことに成功している。周代の文獻史料の不足とともにその編纂過程での様々なバイアスから見れば、文獻史料の補助學的存在である中國考古學の現状から脱皮し、過度の文獻崇拜を排除し、科學としての考古學が全面的にこの時代の歴史を復原する立場にあることを、著者は身を以て示してくれている。しかも考古學という學問の限界をも充分意識して禁欲的に解釋を進めている。これは新考古學運動以來の歐米考古學で發達している社會考古學の理論を充分咀嚼して、それを中國周代という研究對象に應用したものであり、考古學者の誰かがすべきものであった。著者のファルケンハウゼン氏は、アメリカで教鞭に立つ身であるとともに、中國四川を中心にフィールドワークに携わる考古學者であり、さらには日本での留學經驗を持っているように、東アジア全體の中國考古學・東洋史學の水準を知り得る研究者であり、氏を以てしかこのような総合的な書は生まれなかったかもしれない。各章に設けられた細かな注や參考文獻は、中國での研究状況のみならず、歐米での研究成果さらには日本での研究状況を知ることができる便利な書物でもある。本書は日本語と英語で出版されているが、その點でも、中國語での出版がなされ、ぜひ中國人考古學者への學問的な刺激となってくれることを評者は願っている。

その上であえて本書の内容において希望する點を挙げたい。そ

れは、本書の大きな骨格である「西周後期禮制改革」と「春秋中期儀禮再編」の實體をより詳細に示していただきたい點にある。すなわち儀禮の實體である。西周の儀禮に關しては青銅器銘文からの復原研究（小南二〇〇六）にも見られるように、冊盟儀禮が次第に儀式化していく實體が知られている。そうした儀禮化の實體と西周貴族クランと周王クランとの階層關係を含めた「西周後期禮制改革」の實體を知りたいところであるし、西周前半期の社會構造との變化がどこにあるのかその具體像を知りたい。また、「春秋中期儀禮再編」も、これまでこの時期の青銅器樣式の變化から別の捉え方（江村二〇〇〇）がなされていた段階でもあり、西周の復古的な青銅彝器が生み出されることも古くに林巳奈夫氏によつて指摘されているところであった（林一九八〇）。評者は、「西周後期禮制改革」が周王リネージを頂點とする社會構造の搖らぎに對する社會的制御、「春秋中期儀禮再編」が貴族リネージを中心とする階層構造の搖らぎに對する社會的な制御であると認識するが、その儀禮行爲における具體的な變化を知りたいところである。儀式的メカニズムがその社會の實體を示すと考えるからである。著者も最後に指摘しているように、このような具體的な社會像の限界は、集落遺跡や都市遺跡の實體が不明であるところに問題があり、今後のこの方面での総合的な調査があたりまえであることを期待し、さらには信賴すべき人口復原や消費財の具體的な内容が明らかにすることを期待するところである。そしてまた、庶人より下位に位置付けられる直接生産者と階層上位者との關係性、さらにその下層階級の社會や生活の實體を明らかにされねばならない。すでに述べてきたように、現在の考古學的事實は社會

の階層上位者の實態を示すものにしか過ぎない。それらの階層上位者を支えていた直接生産者である下層階級の社會構造を含めた周代の社會構造を検討することにより、初めて周代の正當な社會を復原したことになるからである。最後に願わくば、周代を「國家段階の社會」とする著者の目から、中國史上のその特徴と、さらには人類史上の周代の特殊性と普遍性が將來語られんことを、評者は期待するものである。

なお、巻末には譯者の吉本道雅氏によつて、日本における周代研究の研究史が三代代に分けて簡潔に説明され、その上で本書の意義が述べられている。また、西周期の絶對年代に關する著者の意見との違いが述べられているが、史記年表にみられる紀元前八四一年以前は、確實な絶對年代の決定法がいまだ確立されていない段階と思われる。この西周期の絶對年代は、現在日本考古學界でも論争中にある彌生時代の開始年代の問題とも直結している。我々考古學者は今しばらく相對年代に重きを置かざるを得ない立場にある。

最後に、翻譯にあたられた吉本道雅氏らのご努力を慰勞し、日本語版の出版を心から喜びたい。

参考文献

- 江村治樹 二〇〇〇『春秋戰國秦漢時代出土文字資料の研究』汲古書院
 小南一郎 二〇〇六『古代中國 天命と青銅器』京都大學學術出版會
 林巳奈夫 一九八〇『周禮』の六尊六彝と考古學遺物『東方學報』第五二冊
 宮本一夫 二〇〇七『漢と匈奴の國家形成と周邊地域——農耕社會と遊牧社會の成立——』『九州大學二一世紀COEプログラム』「東アジアと日本…交流と變容」統括ワークショップ報告書

二〇〇六年十二月 京都 京都大學學術出版會
 B 五判 iv 十三五頁 八二〇〇圓